

自立活動の実践について

田中 紀行(大阪府立交野支援学校)

<概要>大阪府立特別支援学校の肢体不自由校では、視線入力装置や身体の動きなど様々な形で実践されるようになった。しかし、発達段階から見た生徒への実践の報告が少ない現状である。そこで、本実践では、学習到達度チェックリスト⁽¹⁾で実態・課題を整理し、その後、実践を行った事例を紹介する。

①視線入力について

1. 問題と目的

近年、ICT 機器の発展は目覚ましく、特別支援学校でも多角的な支援方法として ICT 機器が取り入れられている。例えば、視線入力によって各種のスイッチ操作を行う等 ICT 機器の活用が図られている。また、文部科学省の「特別支援教育の ICT の活用について」は、視線入力装置の活用が言及されている。しかし、発達段階から見た生徒への継続した活用は少なく、実践の報告が少ない現状である。

そこで、本実践では、自立活動の 6 区分と学習到達度チェックリスト⁽¹⁾で実態・課題を整理し、その後、「見る・気づく」段階での課題を視線入力装置で行い、その変化を記録・比較する活用を試みた。

2. 方法

1) 対象生徒の実態

- ・脳性まひ(中学部)
- ・自立活動 6 区分:

健康の保持	腹臥位で自力排痰がしやすくなる。
心理的な安定	見通しを持ちやすいように言葉かけがあると落ちつく。
人間関係の形成	友だちを意識して競争を楽しむことができる。
環境の把握	追視等の様子が見られる。

身体の動き	ヘッドレストがある重力除去位では頸の回旋ができる。
コミュニケーション	快・不快を表情で伝えようとする。

・学習到達度チェックリスト:

言語発達レベル2~4か月

・ねらい:外界の人や物に注意を向け、見る・表情を変える・目を開閉することができる。

2) 自立活動の実施期間及び実施形態

自立活動は 1 回40分間で、2022年6月~9月の期間、生徒の欠席もあり隔週 1 回、全8回実施した。ここでは、1~3回目を前期(単独のアニメのキャラクター画像)、4~6回を中期(教員や家族写真)、7・8回を後期(複数のアニメのキャラクター画像)と提示する画像を分けて行った。

3) 視線入力の課題の内容

①「見る・気づく」段階:家族写真やアニメのキャラクターの画像を提示し、視線で見ないように促した。

4) 評価方法

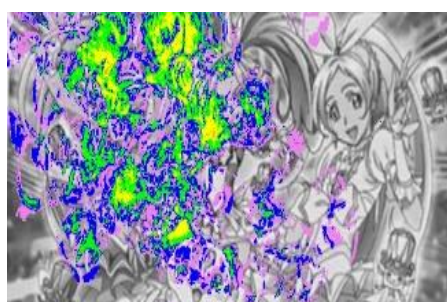
「見る・気づく」段階において眼球の動きの評価はマイクロソフトキネクトを使用した。マイクロソフトキネクトとは、人の身体の姿勢や動きを検出することできるデバイスである。そのソフトウェアとして OAK⁽²⁾を用いて眼球の動きを記録した。OAK では、動きの量により検出する色が変わり動きが多いところは赤くなり、少ない部分は紫になり記録として残る。

3. 経過

セッティングでは、アニメのキャラクターの画像を提示し、生徒が見つめるとマウスポインターが表示され、どの位置に視線が向けられているかをわかるようにした⁽³⁾。前期では、覚醒レベルも低く、アニメのキャラクターに興味を持って見ている様子ではなかった(図1)。中期では、教員や家族写真をモニターに提示すると、人の顔に注目し、アニメのキャラクターよりも見る時間が延びていた。後期では、複数のアニメキャラクターを提示すると、覚醒レベルも上がりキャラクター全体を見てから、特定のキャラクターを見ることがあった(図2)。



前期の眼球の動き(図1)



後期の眼球の動き(図2)

4. 結果

実践を通して見られた生徒の様子から次のことが考えられる。

○視線入力の活用

①繰り返し行うことで、見通しを持ち、覚醒する時

間が上がった。

○教師の働き掛け

①頭部を支えてヘッドレストで姿勢を安定すると画面をじっと見ることができた。

②家族写真をきっかけに、視線の動きを捕えることができた。

5. 今後の課題

視線入力装置を活用して、教師も生徒も互いが見て分かるコミュニケーションをしなければ、このような眼球の動きでの評価をすることは困難であった。今後の課題として「見ると変化が起こる」ことに気づくように、気付く段階の学習内容に十分な時間をかける必要がある。また、継続して視線入力の授業実践を重ね、コミュニケーション能力の向上を図る必要があると考える。

②身体の動き(動作法)の視点から

1. 自立活動の機会を持つ

学部1年生より、地域の特別支援学級から特別支援学校へ入学する生徒Aくんがいた。特別支援学校の中学部1年生の段階では週1回のマンツーマンの自立活動を設定することで身体全体のリラクゼーション課題に取り組むことができるようになった。しかし、学校的生活環境の変化や身体に触れることに対して注意が散漫になり、抗重力姿勢への細かい課題設定が難しい状態であった。

中学部2年生になると、動作法の経験を有する担任が自立活動の指導(通年週1回マンツーマン)に介入することができた。そこで、抗重力姿勢への課題を取り入れる機会をもった。以下は、その指導内容と経過、結果である。

2. Aくんの姿勢作り

(1) Aくんの実態

・5p 欠失症候群

中学部2年生(14歳)

学習到達度チェックリスト スコア8

・学校・日常生活の様子

サインで意思疎通を図ろうと社交性がある。一方で、初めて会う人に対して衝動的な行動が出てしまう。進級当初、他者をつねるなど感情のコントロールが難しい場合が多かったり、ご家族の方の髪の毛を引っ張るといった衝動的な行動が見られたりした。

身体の面では、アキレス腱が短縮したり、腸骨筋周りが亢進したりと介助歩行の動作が難しくなっている。

以上のコミュニケーションの課題と並行して、身体の課題の面からは、リラクゼーション課題後抗重力姿勢に取り組んだ。

(2) 動作法の実践

① 目標

「教員と一緒にタイミングを合わせながら、両膝立ちの姿勢を一人で保つことができる」

② 指導期間

20XX年4月～20XX+1年3月

週1回30分の自立活動を全35回行った。

③ 実施内容と経過

<1学期>

- ・仰臥位 膝の屈曲・伸展、足首の曲げ伸ばし
- ・側臥位 体幹のひねり
- ・あぐら坐位 背そらせ、腕上げコントロール、左右の重心移動
- ・両膝立ち 股関節の曲げ伸ばし

【1学期の経過】

仰臥位では、抵抗も少なくマットの上で姿勢変換をすることができた。体幹のひねりでは、最初は肩周りの緊張が抜きづらかったが、繰り返し行うと教員が示す方向に身体をひねることができた。背そらせでは、教員の指圧が強い支援で方向を示すことで、背中を預けることができた。両膝立ちでは、上体をすぐに崩してしまい、教員との接地

面を多くしながら、両膝立ちの姿勢を共有するだけにとどまった。

<2学期>

1学期と同様に課題に取り組み、新たにあぐら坐位ではペコポコ、介助歩行を取り入れた。

【2学期の経過】

体幹のひねりでは、ひねることへの抵抗はほとんどなくなり、スムーズに教員が示す方向に身体を預けることができた。ペコポコでは、背中慢性緊張がある部分に教員が意識しやすいように手を当てて、上体をあげるように促すと、そこを意識して上体を上げ、軸を作ることができた。両膝立ちでは1番から6番まで上体を直にして、上体を一人で数秒間保つことができた。介助歩行では、座り込むことや足を止めてしまうことが多く踏み出し動作での重心移動が不十分であった。

<3学期>

2学期と同様の課題を繰り返し行った。

【3学期の経過】

背そらせでは、教員のソフトタッチの支援で身体を動かす方向を示すと大きな緊張もなく身体を教員に預けることができた。両膝立ちでは、正座の姿勢から教員が上体を上げるように促すと自分から重力方向に上体が真っ直ぐなるように姿勢を変換して両膝立ちの姿勢へもっていくことができた。介助歩行では、教員が前方介助をしながら足を踏み出す際のタイミングに合わせて、声掛けをし、足を一步一步前に出して止まることもなく、目的の場所まで歩くことができた。

④ 結果

背そらせ、ペコポコ、両膝立ちを教員のタイミングに合わせて力のコントロールをすることができた。また、両膝立ちでは、1番から6番まで上体を直にして姿勢を保つことができた。

3. 考察

動作法の介入当初は、常に身体に力を入れている状態であったり、対人関係の構築が難しかったりした。こうした状況から、動作法によるリラクゼーション課題による体験や教員との関係性の深化により、

自体のコントロールを強化したりや対人関係が広まることにつながってきたと考えられる。学校生活でもいくつか変化が見られた。まず、他傷が減ったことである。進級当初は、他者に強くつねることもあったが、つねる回数が減ってきた。次に、歩行動作の改善である。中学部1年生では、歩行器で立位だけで足が出なかったが、動作法後は足を止めることなく歩行動作をする様子がみられた。最後に、対人関係の広がりである。友だちの写真カードをよく見たり、マカトンサインで気持ちを一部伝えたりと周囲の環境への広がりがあった。このようになった背景として田中氏のダウン症児との報告と同様に自分の身体を正しくコントロールすることが情緒の安定につながったり、動作課題を通してコミュニケーション活性化させることで、他者の存在がより明確化されたりしたことが当てはまると考える。

家庭生活では、兄弟の髪の毛を引っ張るといった他傷が減ったり、キッチンの食事を両膝立ちでつまみ食いをしたりと動作法の課題を通しての変化と同様の様子が見られた。

今後も同様の課題を繰り返し行うことで本生徒の身体や情緒面の成長につなげていきたい。

参考文献

- (1) 徳永豊(2014),『障害の重い子どもの目標設定ガイド授業における「学習到達度チェックリスト」の活用』慶応義塾 大学出版会
- (2) 武長龍樹・馬淵守・中邑賢龍(2016),『黙って見るコミュニケーション 重度・重複障害の子ども

も達とのコミュニケーションのポイント,株式会社 atac

(3) 伊藤史人(2017),『視線入力装置入門, はげみ6・7月号 第374号,4-7

(4) 田中新正(1992)『ダウン症児のための動作法』『教育臨床動作法』成瀬悟策(編)、至文堂。

*注釈

OAKは、体の動きに困難がある方の能動的な活動を支援することを目的としたソフトウェアである。脳性まひや脊髄性筋萎縮症(SMA)などで、重い障がいがある方の任意の動きを検出し観察することができる。また、体の動きをスイッチ操作に置き替えてパソコンを利用する等操作することもできる。